

老年支援論演習における授業方法の現状と今後の課題

池俣志帆*・井上千秋*・川上 将*・小松美砂*

Current Situation and Future Issues of Teaching Methods in Seminar on Gerontological Nursing

Shiho IKEMATA, Chiaki INOUE, Susumu KAWAKAMI and Misa KOMATSU

要 旨

椋山女学園大学看護学部老年看護学領域では、学部のカリキュラムに基づいて講義、演習、実習を行っており、2015年度、2021年度に看護学部においてカリキュラム変更を行った。3年次前期に開講する「老年支援論演習」の授業展開の方法を示した。1・2年次の既習科目の学習内容を想起させることや、3年次後期からの実習に向けて必要となる知識、技術の準備といった「老年支援論演習」の位置づけや求められる演習内容の工夫点を確認した。今後も、学生が高齢者を具体的にイメージできる工夫や、模擬患者の活用、臨地実習での看護援助技術場面のニーズに応じて、演習方法、演習内容を検討していくことが課題である。

1. はじめに

我が国の65歳以上の高齢者人口は3,621万人となり、高齢化率も28.9%となった。また、高齢者人口の内、75歳以上の後期高齢者人口は1,867万人と年々増加している。そして、後期高齢者人口は、2054年まで増加傾向が続くものと見込まれている（内閣府、2022）。超高齢社会にあり、要介護者や認知症高齢者も増加する中、高齢者へ質の高い医療や看護を提供できるよう、老年看護に求められる役割は大きいといえる。1990年に老年看護学が看護教育カリキュラムに位置づけられた。椋山女学園大学看護学部老年看護学領域では、学部のカリキュラムに基づいて講義、演習、実習を行っている。本学看護学部では、2015年度、2021年度にカリキュラム変更を行った。本稿では、演習科目である「老年支援論演習」の授業展開の方法を示し、今後の演習方法を検討することを目的とする。

* 看護学部 看護学科

II. 老年看護学の概要

本学の老年看護学科目は、必修科目では1年次後期に「老年看護学概論」2単位、2年次前期に「老年支援論」1単位、3年次前期に「老年支援論演習」1単位、また「成人老年ベーシック実習」2単位、3年次後期より「慢性期成人老年看護学実習」4単位（その内、病院実習3単位、介護老人保健施設実習1単位）、「急性期成人老年看護学実習」3単位、4年次前期には選択科目として「老年期ケア論」1単位が配置されている。2021年度入学生より新カリキュラムとなり、1年次後期科目「老年看護学概論」は継続、2年次「老年看護支援論」は名称変更と共に開講時期は後期へ、3年次前期科目は「老年看護支援論演習」へと名称変更、「老年期ケア論」は廃止科目となった。老年看護学科目における実習は、3年次後期より4年次前期にかけて行われる「老年看護学実習」3単位（その内、病院実習2単位、介護老人保健施設実習1単位）となり、2023年9月より当該実習が開始する。

III. 「老年支援論演習」の実際

「老年支援論演習」では、『老年期にある対象の看護過程と看護援助』をテーマとし、高齢者への看護過程の展開方法と、看護援助技術の学習を行う。到達目標は1) 老年期にある対象の事例を用いて看護過程の展開を行う、2) 健康問題や日常生活を捉え看護実践へとつなげる能力を習得する、3) 老年期にある対象の日常生活援助における知識と技術を習得する、である。2022年度「老年支援論演習」のスケジュールと内容については、表1に示す。

表1 2022年度「老年支援論演習」のスケジュールと内容

回数	演習内容	形式
1	老年支援論演習のガイダンス、老年支援論演習の意義	講義
2	老年支援論演習事例の説明	
3	高齢者疑似体験演習	演習
4		
5	アセスメント・関連図・クラスタリング・看護上の問題、看護計画（排泄・食事）	講義
6		
7	高齢者の排泄への援助（おむつ交換）	演習
8		
9	高齢者の食事への援助（食事介助）	演習
10		
11	アセスメント・関連図・クラスタリング・看護上の問題、看護計画（活動・休息）	講義
12		
13	高齢者の活動・休息への援助（レクリエーション・歩行介助）	演習
14		
15	老年支援論演習のまとめ、慢性期成人・急性期成人老年看護学実習に向けて	講義

1. 高齢者疑似体験演習

1・2回目の講義形式でのガイダンスに続き、3・4回目は高齢者疑似体験演習を行う。高齢者疑似体験演習では、高齢者の身体的特徴を疑似体験し、高齢者の心理状況を推測することで、看護師としての介入方法を考えることを目的としている。高齢者の知覚機能低下や筋・骨格系機能低下による日常生活への影響（不自由さ）を考え、身体的不自由さが心理的側面にどのように影響しているかについて気付くこと、等を目標とした演習である。学生は事前課題として、1年次の「老年看護学概論」で学習した高齢者の身体的特徴について、課題レポートにまとめる。事前課題の記載状況については、演習開始時と演習後の課題レポート提出時に確認する。また、事前に学習管理システム Google Classroom 内にて、教員が作成した『高齢者疑似体験スーツ着用の仕方』の動画をアップし、演習時の体験動作へスムーズに移行できるようにしている。高齢者疑似体験では、学生が高齢者役、看護師役、観察者役を担い、各20分前後で体験する。体験場所としては、浴室、トイレ、階段、ベッド等としており、入浴動作であれば、浴室まで移動ができるか、シャワーを使うことができるか、体を洗うことができるか、といった体験内容例を提示している。これらの体験内容例は、NANDA-I看護診断（T.ヘザー、上鶴&カミラ、2021）の診断指標を基に作成しており、5回目以後の演習において、看護計画立案の際の短期目標設定や、高齢者の身体動作の一つ一つの動作に着目して観察、介入ができるようにしている。高齢者疑似体験の実施後には、学生4～6名で30分程度グループワークを実施し、高齢者役や看護師役の体験を通して感じたことや、気づいたことをクラス全体で20分程度発表、共有する。高齢者疑似体験演習で得られた高齢者の身体的特徴の理解や、日常生活の不自由さへの気づき、等の学びを、5回目以降の看護過程の展開や、看護援助技術の演習へと活用する意義から、初回演習に組み込んでいる。

2. 看護過程の展開

1・2回目の講義にて、高齢者に特徴的な疾患や症状を有する患者の演習事例が説明、提示される。その後2週間程度かけて個人でアセスメントを実施する。事例演習の目的としては、疾患や健康障害をもつ高齢者が対象ではあるが、疾患・疾病による健康問題だけに焦点を当てるのではなく、高齢者のこれまでの生活や価値、信念に注目し、どのような健康状態であってもその人らしい日常生活を送れるように支援することの重要性を学ぶ点、また老年看護における看護過程では、「問題解決型思考」も考慮しながら、高齢者が望む生活や望む姿を見据えた「目標志向型思考」のプラス思考で看護過程を行う（山田、2020）ことも同時に学習することである。加えて、高齢者を疾患や障害を有している生活者として捉え、生活機能の観点からアセスメントし、看護を展開する点も理解することを目指している。個人でのアセスメント実施においては、『老年看護学アセスメントガイド』を用い、ゴードンの機能的健康パターンの各パターンにおける留意点や、根拠について確認しながら行うよう、講義内で伝えている。この『老年看護学アセスメントガイド』は、本学の老年看護学領域教員にて作成したものであるが、学生は高齢者事例における各パターンのアセスメントの特徴について、「老年支援論演習」にて知識を得て、領域別実習においても継続的に活用できるようにしている。5・6回目、11・12回目では、講義形式にて演習事例の看護過程の展開を行うが、個人で行ったアセスメントの方向性の確認

や、看護診断、看護計画を立案する。本学の老年看護学領域では、NANDA-I 看護診断を用いている。5・6回目では、排泄や食事に関連した看護診断を講義内で確認後、おむつ交換を含む排泄ケア及び食事支援に関する看護計画を個人で立案する。11・12回目では、活動や休息に関連した看護診断を講義内で確認し、移乗や歩行、気分転換活動に関する看護計画を個人で立案する。いずれにおいても、看護計画の立案に際し、看護技術を実施する環境、使用する物品等がイメージできるよう、教員にて事前に撮影した演習室内の動画を視聴する。排泄ケアでは、洋式トイレの扉や手すりの位置等、食事支援では、食事用のテーブル、椅子、食具等、移乗や歩行ではベッド周囲の環境や車椅子のセッティング、使用する杖、気分転換活動ではレクリエーションの物品や工夫点等を各10分程度の動画で確認し、個々の看護計画立案へとつなげている。15回目の講義では、老年支援論演習での学んだ看護過程の思考をまとめ、慢性期成人老年、急性期成人老年看護学実習に向け、演習での学習内容を活用するための具体的な方法や目標を個々で考え、クラス内で発表、共有する。

3. 看護援助技術

1) 高齢者の排泄への援助

7・8回目では、高齢者の排泄への援助の看護技術を実践する。①高齢者への排泄のアセスメントができる、②排泄方法の種類と特徴について理解することができる、③おむつの種類や特徴を理解することができる、④排泄援助の実施や評価ができる、を演習目標としている。看護過程の演習事例を対象とした看護計画に基づく、トイレ内でのリハビリ型のおむつ交換を20分程度かけて行う。学生は、高齢者役、看護師役でペアとなり看護計画の実践を行うが、気づきや学びについて各自で振り返り、看護計画の追加や修正を行い、よりよい看護援助を考える。また、演習事例とは別に、領域別実習に向けて身につけておくべき技術として、ベッド上でのテープ型のおむつ交換の技術実践、おむつの種類や特徴についての技術、排泄援助用品の取り扱い等についての技術、を各20分程度実施する。排泄への援助の技術実践後には、学生4～6名にてグループワークを20分程度実施し、演習内で学んだことや気づいたことをクラス全体で20分程度かけて発表、共有する。

2) 高齢者の食事への援助

9・10回目では、高齢者の食事への援助の看護技術を実践する。①摂食・嚥下過程を理解することができる、②食事に対する看護（食前のケア、食事時のケア、食後のケア）を理解することができる、③加齢、疾患に応じた食事時のケアを安全に行うことができる、④加齢、疾患に伴うコミュニケーションの特徴を考慮しながら、声のかけ方や、かわり方の工夫について考えることができる、⑤高齢者の持っている能力や、強みを活かしながら、食事支援を行うことができる、を演習目標としている。看護過程の演習事例を対象とした看護計画に基づく、食事介助を20分程度実践する。食事介助の実践では、一口量や口元に運ぶスピード等を考慮する必要があることから、食品の取り扱いはあるが、新型コロナウイルスの感染拡大が懸念される中、感染対策上マスクを装着したままで高齢者役、看護師役の学生がペアとなって、食事介助の実施をしている。食事介助における、気づきや学びについては、各自で振り返り、看護計画の追加や修正を行う。演習事例とは

関連しないが、領域別実習に向けて見学や実施機会のある、経管栄養の技術、義歯脱着の技術をシミュレータやトレーニングモデルを用いて行う。また、食具の種類や特徴についての技術を学ぶ。これらは、各20分程度技術実践を行う。食事への援助の技術実践後には、20分程度のグループワークを行い、演習内で学んだことや気づいたことをクラス全体で20分かけて発表、共有する。

3) 高齢者の活動・休息への援助

13・14回目では、高齢者の活動・休息への援助の看護技術を実践する。移動・移乗では、①高齢者の移乗・移動・転倒のアセスメントの視点を説明できる、②高齢者の移動介助において安全面と持ちうる能力を考慮できる、③運動機能に障害がある高齢者への歩行介助や福祉用具の利用を考えることができる、④療養環境の工夫について考えることができる、を演習目標としている。活動の支援（レクリエーション）では、①高齢者のもてる力を引き出し、活動意欲をもてるような支援について考えることができる、②高齢者が興味、関心、意欲を持てる内容を企画し、実施できる、を演習目標としている。看護過程の演習事例を対象とした看護計画に基づく、活動・休息への援助として、ベッドから車椅子への移乗、車椅子移送、杖歩行の介助、レクリエーションの実施を各20分間行う。また、車椅子、杖、歩行器等の補助具の種類や特徴を学習する。活動・休息への援助の技術実践後にも、20分間グループワークを行い、演習内で学んだことや気づいたことをクラス全体で20分かけて発表、共有する。

IV. 老年支援論演習の課題と今後の展望

3年次前期科目である「老年支援論演習」は、1・2年次に学習した「老年看護学概論」、
「老年看護学支援論」での知識を確認、活用できることが望ましく、3年次後期からの「慢性期成人老年看護学実習」、「急性期成人老年看護学実習」に向けて、知識や技術を獲得し、実習に臨むことが求められる。

高齢者疑似体験演習では、事前課題として、『高齢者の身体的特徴について記述する』、
ことで、日常生活動作における不自由さを単なる感想ではなく、根拠を持って気づき、体験することができる。事前課題によって、知識がある程度共有された状態で演習を行うことは有効であるとも言われている（大島，2011）。演習事例の看護過程の展開においては、アセスメント、関連図、看護計画などの課題があることから、看護技術実践において特別な事前課題の提出を求めなかったが、今後は2年次の「老年看護学支援論」で学習した内容を十分に想起した上で演習に参加するよう事前課題を工夫することを検討したい。

各演習課題のレポートには、教員が目を通し、演習目標と照らし合わせ、充足している箇所等は赤字で下線を引く等した。また、逆にレポートの記述内容が不足している場合には、コメントを加えた。クラス全体での主要な意見や、演習内容からの学びのポイントについては、講義形式での演習の際に、学生に伝えるようにした。演習内でのグループワークや、発表を通して、自己のグループの気づきや学びをまとめる機会となり、また他のグループの発表を通して、自己の学びの追加や、新しい気づきの機会となり、クラス全体の学びの向上につながるものと考えており、今後も継続していく。

臨地実習において、「テープ型のおむつのあて方がわからない」、「ポータブルトイレの後始末の方法がわからない」、「義歯の外し方がわからない」、「経管栄養を初めて見た」、といった場面を学生や、臨地実習指導者から学生の様子として見聞きすることがあり、看護技術演習の演習内容を都度調整している。今後も、老年看護学実習において、学生が経験する機会の多い看護技術を想定し、演習内に組み込んでいくことが、より求められるといえる。これまで、学生の学習内容については、発表やレポートの記述から読み取ってきたが、レポートの記述内容を分析し、演習目標と照らし合わせて不足している点が無いか評価し、演習内容を見直していく必要があるとも考えている。

看護技術実践では、老年看護学領域教員が学生の技術実践の指導を行っている。学生からの質問への対応や、技術面で気づいたことはその場で直接学生に伝えている。近藤(2020)は、学生の技術実践場面を動画で撮影し、動画分析することで、学生がどのように行動したのかがわかるとしており、動画撮影にて学生の行動を観察している。このような工夫を取り入れることで、動画記録から教員と共に技術の確認ができることや、学生自身の振り返りも行うことができる利点があることから、活用していきたい方法である。

何より、紙上事例での高齢者ではあるが、一人の高齢者として、イメージしてもらうことは工夫が必要な点である。学生が高齢者をイメージすることで、対象への興味、関心を持ち、理解しようとするにつながると考えるためである。これには、講義内で動画視聴を通しての事例高齢者の片麻痺での上肢、下肢の動き等の身体動作、その人柄や性格、そして入院後の生活のみならず、入院前の生活にも着目することをできるだけ意識づけている。高齢者の実際が描写されたビデオ映像を教材として用いることで、高齢者特有の状態や特徴を学生は視覚的に捉え、高齢者をイメージしやすい(佐藤他, 2010 & 木島他, 2014)。そして、高齢者疑似体験で気づいた点を想起させる目的でも、5・6回目の講義の際には、学生が記述した高齢者疑似体験演習レポートを各自の手元に返却し、以降の事例演習の看護計画立案や看護技術実践時の高齢者役のイメージに活用できるようにしている。高齢者の日常生活動作における不自由さがどのような所にあり、どのような心理状況にあるから、どのような声かけをすることが求められるのか、ということを常に考え、看護過程の展開そして、看護援助技術を実施するように意識づけている。看護援助技術の実施では、学生同士でペアになるため、学生が高齢者役を担うことになるが、日常生活動作に不自由を感じていない学生が高齢者の身体的特徴を模倣することは難しい。よって、高齢者疑似体験演習を行った際の日常生活動作の不自由さを想起し、高齢者の動作を具体的にイメージしながら高齢者役を実践できることが望ましい。しかし、学生が高齢者役をすると、看護師役の学生に対する遠慮から、感じたことを直接伝えづらいこともある(石川 & 山田, 2014)。やはり高齢者とのコミュニケーション技術の習得については、模擬患者を活用する等の検討も行い、より臨場感のある演習とすることで、高齢者の理解、そして老年看護学の学びへ結び付けていきたいと考えている。

V. おわりに

演習科目である「老年支援論演習」の授業展開の方法を示した。1・2年次の既習科目の学習内容を想起させることや、3年次後期からの実習に向けて必要となる知識、技術の

準備といった「老年支援論演習」の位置づけや求められる演習内容の工夫点を確認した。今後も、学生が高齢者を具体的にイメージできる工夫や、臨地実習での看護援助技術場面のニーズに応じて、演習方法、演習内容を検討していく。

文 献

- 石川智子, 山田ノリ子. (2014). 老年看護学看護過程演習の報告—模擬患者を活用した授業による気づきと課題—. 神奈川歯科大学短期大学部紀要, 1, 13-17.
- 木島輝美, 安川揚子, 高橋順子, 他. (2014). 生活機能に焦点をあてた認知症高齢者の視聴覚教材の作成と看護過程演習への活用に向けての課題の検討. 札幌保健科学雑誌, 3, 35-42.
- 近藤邦, 阿久津滝子, 松本正人, 他. (2020). 「安全管理の技術」演習における授業実践研究—危険因子場面に対する看護大学生の安全確保技術の動画分析—. 山陽看護学研究会誌, 10(1), 118-124.
- 内閣府 (2022), 第1章 高齢化の状況, https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2022/zenbun/pdf/1s1s_01.pdf, 2022年9月14日.
- 大島武 (2011), マネジメントスキルアップ特集プロに学ぶ「教え方」. 看護展望, 36(7), 34-47.
- 佐藤光年, 川島珠実, 荻野朋子, 他. (2010). メディア教材は学生の高齢者理解を深めることに効果的か—ビデオ教材を用いた学習の実践を通して—. 四日市看護医療大学紀要, 3(1), 1-7.
- T. ヘザー・ハードマン, 上鶴重美, カミラ・タカオ・ロペス (2021)/上鶴重美訳 (2021). NANDA-I 看護診断—定義と分類 2021-2023—原書第12版. 東京: 医学書院.
- 山田律子 (2022), 生活機能からみた老年看護過程+病態・生活機能関連図 第4版, 東京: 医学書院.